

〔研究ノート〕

アメリカの公立学校における進化論教育と信仰の自由Ⅱ

鈴木 慎太郎

- 1 はじめに
- 2 ヌスバウムの見解——公教育へのID導入は違憲
- 3 ネーゲルの問題提起——公教育でのIDへの言及は合憲？
- 4 ドゥオーキンの議論——やはり公教育へのID導入は違憲？
- 5 グリーナワルトの提案——公教育におけるIDに対する適切な対応
- 6 むすびにかえて

1 はじめに

信仰の自由を保障しつつ、科学的に真理とされることと宗教的に真理とされることが相反する場合に、国家はどのように対応すべきか。筆者は、かつて、公立学校における進化論教育の扱いを定めた州法の合憲性が争われた——そして国教樹立禁止条項違反として違憲とされた——合衆国最高裁判所の二つの判決を検討したが¹、本稿では、アメリカの哲学者、法学者の議論を参考にしつつ、こうした公立学校における進化論教育と宗教的自由の問題——とりわけインテリジェント・デザイン（以下、ID）をめぐる問題²——について少し考えてみたいと思う。

1 拙稿「アメリカの公立学校における進化論教育と信仰の自由」愛知学院大学宗教法制研究所紀要50号（2010年）。

2 インテリジェント・デザインとそれをめぐる議論に関する全般的な理解に資する文献として、ユージーニ・C・スコット『聖書と科学のカルチャー・ウォー—概説 アメリカの「創造vs生物進化」論争』（鶴浦裕・井上徹訳）（東信堂、2017年）、勝田卓也「最高裁は創造説を排除できるのか？——The Story of Edwards v. Aguillard, 482 U.S. 578 (1987)」大沢秀介・大林啓吾（編）『アメリカ憲法と公教育』

2 ヌスバウムの見解——公教育へのID導入は違憲

哲学者のヌスバウムは、宗教的平等に関するアメリカの伝統を論じる著作において、「公立学校は長い間、複数の集団が自ら推奨する教義や儀式などを持ち込もうと張り合っている戦場となっている。…（中略）…学校で進化論を教えることは、二〇世紀初頭から宗教的な議論を引き起こしてきたが、ふたたび論争的となっている。最近、数多くの州の高校の科学カリキュラムのなかで、進化論の代わりに『インテリジェント・デザイン Intelligent Design』を盛りこもうという試みがなされたのだ」³と述べている。そして、この問題に対する争いには三つの段階があったとして、これまでの訴訟の動きと結果を次のように簡潔にまとめる。

最初の段階において、進化論教育を禁じる法は、国教樹立禁止条項と相容れないものとして無効とされた。第二の段階において、進化論の反対者は禁止を求めるのではなく、進化論と並行して天地創造説を教えることのみ求めた。この試みもまた失敗したとき、反進化論運動は再編され、より科学的に見えるもう一つの可能性、インテリジェント・デザイン（知的設計論）Intelligent Designを生み出したのである。この新しい理論は、法廷において審査され始めたばかりである。⁴

ヌスバウムは、これに続けて、第一の段階に位置付けられるエパーソン対アーカンソー事件⁵、第二の段階に位置付けられるエドワーズ対アギラード事件⁶の概要を説明する。いずれの事件についても、法廷意見を好意的

（成文堂、2017年）29-34頁参照。

3 MARTHA C. NUSSBAUM, LIBERTY OF CONSCIENCE: IN DEFENSE OF AMERICA'S TRADITION OF RELIGIOUS EQUALITY 307(2008). マーサ・ヌスバウム（河野哲也監訳）『良心の自由——アメリカの宗教的平等の伝統』（慶應義塾大学出版会、2011年）468頁。

4 *Id.* at 320. ヌスバウム（河野監訳）・前掲注（3）486頁。

5 *Epperson v. Arkansas*, 393 U.S. 97 (1968).

6 *Edwards v. Aguillard*, 482 U.S. 578 (1987).

に紹介していることから⁷、ヌスバウムは、公立学校での進化論教育に否定的な州法を国教樹立禁止条項に反し違憲とすることに肯定的であると思われる。それでは、第三段階に位置付けられるIDを公教育に持ち込むことについてはどのように考えるのだろうか。ヌスバウムは、IDについて次のように説明する。

近年、進化論の反対者たちは、科学的説明の基準に、より注意を払うようになり、また、創造科学の、より知的で洗練されたヴァージョンを生み出した。それが「インテリジェント・デザイン」すなわちID〔Intelligent Design〕である。その消極的な主張は、進化の歴史記録に見られる欠落が進化論の弱点を示している、ということである。IDにとっては不運なことに、留意されたそれらの欠落のうちのいくつかは、進化論を強く裏付ける新たな化石の証拠によって、今では満たされてしまっている。IDの主要な積極的主張は、自然のうちの「還元できない複雑性」のいくつかの事例は進化によってではなく、これらの生命形態を創造した卓越した知性、すなわち「偉大な知性master intellect」を仮定することによって、もっともよく説明されるのだ、という主張である。支持者たちがこの知性に名前をつけず、またしばしばこれが宇宙人や、何か神とはまったく別のものであるかもしれないと主張しているにしても、この理論が創造科学の末裔であり、深い宗教的な根源を持っていることは明白である。⁸

ヌスバウムは、IDを「創造科学の末裔」として捉え、また、それが「深い宗教的な根源」を持つものと捉えている。このことから、ヌスバウムは、IDを公教育に持ち込むことに否定的な立場を取ると考えられるが、実際に、上記引用文に続く箇所において、IDを生物学の授業に取り入れよう

7 NUSSBAUM, *supra* note 3, at 320-322. ヌスバウム（河野監訳）・前掲注（3）486-489頁。

8 *Id.* at 322. ヌスバウム（河野監訳）・前掲注（3）489頁。

とした教育委員会の決定——より正確には、IDがダーウィンの見解とは異なる生命の起源に関する一つの説明だとする文章を含む四つの段落からなる説明文⁹を、9年生の高校生に生物の授業で読み上げることを求めた¹⁰教育委員会の決定——を違憲とした判決を好意的かつ詳細に紹介している¹¹。とりわけ、この事件に判決を下したジョーンズ判事によるエンドースメント・テストの用い方を評価し、次のようにも述べている。

成功した国家であるために、すべての近代国家と同じく、私たちの国家も科学を必要とする。弱体化されたものではない、最高水準の科学者や科学雑誌の基準を満たす科学である必要があるのだ。私たちの子どもたちは弱体化されていない純粋な科学を学ぶ必要があるし、この領域への宗教的見解の侵入は不運なことである。子どもたちが文化や歴史についての授業のなかでさまざまな異なる宗教的観点を学ぶことは良いことであるように思われるし、また実際有用である。宗教的見解を科学の代わりにすることは、

9 「ペンシルベニア州教育標準は、生徒に、ダーウィンの進化論を学ぶことを求め、最終的に、進化論を含む共通試験を受けることを求める。／ダーウィンの理論は一理論であるため、新たな証拠が発見されるにしたがって、検証され続けられるものである。ダーウィンの理論は事実ではない。ダーウィンの理論には証拠がないため、欠陥がある。理論とは、広範囲にわたるいくつもの観察を統一する、十分に検証された説明として定義される。／インテリジェント・デザインは、ダーウィンの見解とは異なる生命の起源に関する一つの説明である。参考書『パンダと人間について』は、インテリジェント・デザインが現実に関与するものについての理解を得ることに関心のある生徒のために用いることが可能である。／生徒は、いかなる理論に関しても、偏見のない心を持つことが推奨される。学校は、生命の起源についての議論を、個々の生徒や生徒の家族に任せる。標準適合格区として、授業教育の重点は、標準に準拠した評価に基づく習熟度の達成を生徒に準備させることに置く。」(Kitzmiller v. Dover Area School District, 400 F. Supp. 2d 707, 708-09 (M.D. Pa. 2005). なお訳出にあたっては、ヌスバウム (河野監訳)・前掲注 (3) 490-491頁、スコット (鶴浦・井上訳)・前掲注 (2) 228-229頁を参考にした。)

10 ドーヴァーの教育委員会の見解としては、これは、IDを教えるものではなく、単に、生徒がIDの考え方に気づくようにするためのものだけのことのようである。See LAURI LEBOWITZ, THE DEVIL IN DOVER: AN INSIDER'S STORY OF DOGMA V. DARWIN IN SMALL-TOWN AMERICA 62 (2008).

11 NUSSBAUM, *supra* note 3, at 323-325. ヌスバウム (河野監訳)・前掲注 (3) 490-493頁。

われわれの未来を危険にさらすことなのだ。また、その一方で私はジョーンズ判事とともにもう一点を強調したい。というのは、それは不公平でもあるのだ。科学の教育課程のなかに宗教教育を求めることは、一つの団体の宗教的教義に政府の承認を与えることである。¹²

以上のように、ヌスバウムは、IDを公立学校における生物学の授業に持ち込むこともまた、創造科学を公教育に持ち込むことと同様、国教樹立禁止条項違反として憲法違反だと判断していると考えられる。進化論教育を禁じることも、創造科学を授業に持ち込むことも、IDを進化論と並ぶ理論として教室で示唆することも、宗教的な意図に基づくものであり、世俗的な目的や効果は見出せず、宗教に対して政府が承認を与えるようなものであるから、いずれも国教樹立禁止条項によって違憲とすべきもの、とヌスバウムは考えているように思われる。つまり、第一段階の進化論教育禁止法も、第二段階の創造科学も、第三段階のIDも、本質的には同じもの——科学に対する宗教的な見解の侵入——と考えているか、あるいは、「三つの段階」と呼ぶように、進化論教育の禁止が違憲となったから創造科学が持ち出されることになり、さらに創造科学を教えることも違憲とされたからIDが持ち出されることになった、というように、連続的なもの¹³——したがって、やはり根本は同じもの——と理解されているように思う。

ヌスバウムの見解に従えば、IDは進化論教育禁止法や創造科学が進化したものに過ぎず、結局のところ、それは宗教的な見解であるのだから、進化論教育禁止法や創造科学の公教育への導入が違憲とされたのであれば、IDの公教育への持ち込みも違憲とされてしかるべきである、ということになりそうである。しかし、ヌスバウムのようにIDを創造科学の延

12 *Id.* at 327. ヌスバウム（河野監訳）・前掲注（3）495-496頁。

13 前掲注（3）参照。また、ヌスバウムは進化論教育をめぐる争いについて、「この争いには三つの段階があった。今日のわれわれの状況の理解のために、このそれぞれの段階がどのように次の段階を導き、また形作っているのかを理解する必要がある」（*Id.* at 320. ヌスバウム（河野監訳）・前掲注（3）486頁）と述べる。

長線上にあるものとは考えない哲学者が存在する。ネーゲルである。

ネーゲルは、創造科学とIDの間には大きな相違があると指摘する。スバウムの考えるように、創造科学もIDも同根の連続的なものであるとすれば、憲法上の扱いは変わらないかもしれないが、もし、この二つが、相当に相違するものであるとすれば、ひょっとすると、創造科学を公立学校で教えることは許されずともIDは許される、と考える余地があるかもしれない。次節で、ネーゲルの見解を見てみよう。

3 ネーゲルの問題提起——公教育でのIDへの言及は合憲？

ネーゲルは、「IDは若い地球説の創造論とは著しく異なり、その若い地球説を生み出した『創造科学』とも非常に異なる」¹⁴と述べる¹⁵。それでは、IDと創造科学はどのように異なるのであろうか。

ネーゲルの考えによれば、創造科学は、科学的主張 (scientific claim) ではあるけれども¹⁶、経験的証拠 (empirical evidence) によって裏付けら

14 Thomas Nagel, *Public Education and Intelligent Design*, 36 PHIL. & PUB. AFF. 187, 196 (2008). なお、この論文は、軽微な語句修正が施され、THOMAS NAGEL, SECULAR PHILOSOPHY AND THE RELIGIOUS TEMPERAMENT: ESSAYS 2002-2008 (2010) に再録されている。次節で見るドウオーキンが再録前の論文を参照しているため、本稿ではPhilosophy & Public Affairs誌掲載の論文を参照する。

15 「創造科学は聖書を厳密に解釈して地球が比較的最近（聖書を文字通りにとれば6000年前）に作られたとする『若い地球』派と、地質学的な年代については通常的地質学の主張を認める『古い地球』派とに区別することができる。創造科学内部での主流はヘンリー・モリスをはじめとする若い地球派である」（伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』（名古屋大学出版会、2003年）19頁）という。

16 ネーゲルによれば、「聖書直解主義 (Biblical Literalism)」は、経験的証拠の説明として提示されるものではなく、神の啓示として受容されているものであるから、科学的な仮説ではない。それに対して、創造科学は、公立学校における創造論教育が違憲とされたことを受け、地質学や古生物学の経験的証拠に整合的な議論となることをめざして提出されたという点では、科学的主張ではある（経験的証拠に照らせば誤っているけれども）とされる。See Nagel, *supra* note 14, at 196. なお、藤本龍児は、「よくキリスト教の原理主義を説明するばあいには、その特徴として『聖書を文字通り (literal) に受け取る』ということが挙げられる。『原理主義＝反知

れることがなく、誤っており、また容易に反証されるものであるから、¹⁷生徒にそれを教えるべきではない十分な理由があるとされる。¹⁸ ネーゲルは、このように、創造科学については、ヌスバウムと同様、それは公教育で教えられるべきものではないと考えている。しかし、IDについては、次のように説明する。

IDは、創造科学とは非常に異なる。門外漢にとっては、少なくとも、IDは、証拠に関する大きな歪曲や解釈上のどうしようもない矛盾に依拠することはないように思われる。また、聖書直解主義のように、IDの真理は、それに対する経験的反対証拠とは無関係であるという前提に依拠するものでもない。それが依拠するのは、設計者についての仮説は、筋の通ったもので、あらかじめ、それを不可能なもの、あるいは、無視できるほどわずかな蓋然性しかあてがわれないものとして排除することはできない、という前提である。ひとたび、有意な事前確率があてがわれると、IDは、経験的証拠、とりわけ、観察データを説明する標準的な進化論の妥当性に不利

性主義』という考え方をもっていれば、こうした説明を疑いもなく受け取ることになるだろう。原理主義者は反知性主義なのだから、頭を空っぽにしておきただけで聖書の文字を一言一句そのまま受け取るのだ、と。しかし、『直解主義』などと呼ばれるそうした考えは、実際は『聖書無謬説』とは異なったものであるし、原理主義を理解するにも適切なものではない。…（中略）…原理主義者が主張するのは、聖書を文字通りに受け取らなければならない、ということではない。…（中略）…重要なのは、聖書にはいかなる種類の誤りも含まれていない、ということなのである。聖書には神学的な誤りのみならず、歴史的、地理的、そして科学的な誤りも含まれていない、と原理主義者は考える。そうした考えが『聖書無謬説』なのであって、それと聖書を『文字通り』受け取る『直解主義』とを混同してはならない」（藤本龍児『アメリカの公共宗教——多元社会における精神性』（NTT出版、2009年）75頁）と述べ、聖書直解主義と聖書無謬説の混同に注意を促している。さらに付け加えれば、「反知性主義」に関し、「本来『反知性主義』は、知性そのものでなくそれに付随する『何か』への反対で、社会の不健全さよりもむしろ健全さを示す指標だったのである」（森本あんり『反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体』（新潮社、2015年）4頁）というように、「反知性主義」が「積極的な意味」を含むものであるとの見解が存在する。

17 ネーゲルは、PHILIP KITCHER, *ABUSING SCIENCE: THE CASE AGAINST CREATIONISM* (1982) を参考文献として挙げる。

18 Nagel, *supra* note 14, at 196.

となる経験的証拠によって裏付けられるかもしれないもの、それも真剣に
そうかもしれないものとなるのである。¹⁹

このように、ネーゲルの見解では、IDと創造科学は異なるものとされる。創造科学は、経験的証拠と矛盾し、維持することが困難な主張であるが、IDはそうではないという。IDは、経験的証拠によって実証される可能性のある対象とされるのであって、ありえないものとして、それをあらかじめ排除することはできないものとされる。

ネーゲルは、また、進化論の擁護者は、創造科学やIDを「非科学 (not science)」として排除すべきではなく、証拠によって決定的に反証される科学的主張として、つまり、「悪い科学 (bad science)」あるいは「ひどい科学 (dead science)」²⁰ だとして異議を申し立てるべきだとするキッチャーの主張に賛意を示しつつ、しかし、次のように述べる。

IDは悪い科学だ、ひどい科学だという主張は、それが非科学だという主張と同様に、自然秩序における神の介入には真剣に検討すべき可能性はない、という前提に依拠している。それは、科学的な信念ではなく、宗教的な問いに関する信念である。すなわち、神は存在しない、あるいは、仮に神が存在するとしても何らかの方向に世界を導くために自然秩序に神が介入することのないことは確実である、という前提に行き着く宗教的な問いに関する信念なのである。²¹

さらに、次のようにも述べる。

公教育に対するここでの結論のすべては、生物学の授業においてIDに関

19 *Id.* at 196-197.

20 *Id.* at 198.

21 *Id.*

する何らかの言及を含むことも、IDを排除することも、そのどちらもが、宗教的な前提に依拠しているように思われるということである。神の介入があらかじめ排除されるか、排除されないかのいずれかなのである。もし、排除されれば、IDは無視されうる。もし、排除されなければ、IDに関する証拠²²が考察されうる。

以上のようなネーゲルの考えに従えば、IDの存在可能性をあらかじめ排除することも、自然界の秩序に神の介入はない、という宗教的な信念を前提にしていることになる。そうであれば、IDの存在可能性を否定する者は、宗教的信念に基づいてIDの存在可能性について生物学の授業で取り上げるべきだと主張する者と、宗教的信念に基づいた主張を行っているという点においては何ら変わりがないことになる。つまり、IDが存在する可能性²³を否定することも、肯定することも、いずれも宗教的信念に基づくものだというのである。

しかし、もし、ネーゲルのこのような見方が正しいとすれば、国教樹立禁止条項に照らし、IDの存在可能性については公立学校においてどのように扱えばよいということになるのだろうか。ネーゲルは、ドーヴァー事件で用いられた国教樹立禁止条項に関するレモン・テストとエンドースメント・テストに言及した後、公立学校でIDを取り上げることにについて次のように述べる。

22 *Id.* at 200.

23 ネーゲルの主張で注意すべきは、議論の焦点が、IDの否定ないし肯定ではなく、IDの「存在可能性」の否定ないし肯定である点にあるように思われる。ネーゲルは、「IDの擁護には、ただ、可能性として設計が認められるということが必要とされるだけであって、設計が実証的に論破しえないものとされることは要求されない。そうした可能性を認めることが科学的合理性の基準と整合的ではないと主張することは難しいだろう。さらに、もし、可能性としてIDが認められるとすれば、現在利用可能な経験的証拠が決定的にIDを排除する（若い地球説のように）と主張することも難しいだろう。決定的にIDを排除するためには、生命進化の全体を説明する標準的な進化のメカニズムの妥当性が、現在利用可能な証拠によって明確に証明されることが必要である。管見の限り、反対の巧言にも関わらず、そうした証明に近いことはなされていない」（*Id.* at 199.）と述べる。

国教樹立禁止条項の解釈は、決着がついておらず発展途上にあるが、もし、二つのテストを手引きとして用いるならば、IDについての言及は、憲法上、擁護可能に思われる。仮に、適切に提示されるならば、それは、進化論と進化論を肯定・否定する証拠についてのよりよい理解をもたらすという世俗的な目的を有するとして擁護可能であろう。その主要な効果のうちの一部は宗教の促進になるだろうということを根拠にして、このような擁護論は失敗するだろうか。

神の存在可能性を示唆し、仮に神が存在するとすれば、神は生命の進化に何らかの役割を果たしたかもしれないと示唆することによって、そのような効果を持つであろうことは認めざるを得ない。それは、現在の価値観からすれば、あまりに宗教的であるかもしれない。同様に、そのような教育は、神の不存在も真剣に検討すべき可能性があるとし唆することによって、無神論をも促進するかもしれない。よって、どちらの方向も失敗するかもしれない。おそらく、進化論と宗教的信念の関係という主題について²⁴黙して語らないことが、国教樹立禁止条項と矛盾しない唯一の策である。

このように、ネーゲルは、IDの存在可能性に関する言及を、公立学校において国教樹立禁止条項に抵触せずに行える可能性があるという。ネーゲルは極めて慎重に、神の存在可能性に言及することは、神が存在するかもしれないと教えることになる点で、過度に宗教的ともいえるし、他方で、神が存在するかもしれないと教えることは、神が存在しない可能性をも示唆することになるため、無神論を促進することになってしまうかもしれず、いずれも国教樹立禁止条項に反する——したがって、進化論と宗教的信念の関係については言及しないことが憲法上許される唯一のあり方だと述べる。が、しかし、IDの存在可能性についての言及は憲法上容認される余地があると述べている。なぜだろうか。

24 *Id.* at 203-204.

それは、ここまでで概観した通り、ネーゲルは、IDの存在可能性を否定することも、宗教的信念に基づくものだと考えるからである。IDは、これまでのところ、経験的証拠によって否定されておらず、にもかかわらず、その存在可能性を否定することは、経験的証拠によって説明されることを超えて、そもそもIDは存在しえないということを前提とする宗教的な信念に基づくものだからである。IDが存在すると信じて、IDを公教育に持ちこもうとする試みが宗教的であるのと同様に、IDはそもそもあり得ないものだから公教育に持ち込むべきではないと考えてIDを排除しようとする試みも、実は宗教的であるということである。さらに、IDに言及することは、進化論がそもそも対抗した理論について言及することであり、進化論をより深く理解することにつながると考えられるため、このような進化論の深い理解のためにIDに言及するのである、という世俗的な目的を見出し得る。このようにして、公教育におけるIDの言及を合憲と考える余地があるというのである。

このように、ネーゲルにおいては——ヌスバウムとは異なり——、IDは創造科学と異なるものであり、その公教育への導入は——導入の仕方如何によっては——合憲とみなせる可能性があることになる。しかし、ネーゲルの見解について一定の評価を示しつつ、やはりIDの公教育への導入は違憲だと考えるのが法哲学者のドゥオーキンである。次にドゥオーキンの議論を見ることにしよう。

4 ドゥオーキンの議論——やはり公教育へのID導入は違憲？

ドゥオーキンは、宗教的自由の問題の「もっと複雑で意義ある例」²⁵として、公立学校における進化論教育を取り上げ、ドーヴァー事件に言及した

25 RONALD DWORKIN, RELIGION WITHOUT GOD 126(2013). ロナルド・ドゥオーキン（森村進訳）『神なき宗教「自由」と「平等」をいかに守るか』（筑摩書房、2014年）

後、ネーゲルの見解に触れつつ、次のように述べる。

神による創造と突然変異のどちらが人間の生命をよりよく説明するかという問題に関する判断は、それを判断する人が神の存在について前からもっていた信念から決定的な影響を受ける、とネーゲルは指摘する。無神論者は最初から神による創造を排除するだろう。たとえ突然変異と自然選択が人間生命を生み出す確率がもともと小さいとしても、知的設計〔インテリジェント・デザイン〕はそれに対する選択肢にならない。しかし、神の存在を信ずる者ならば、その信念を前提すると、〈この地球に生きている驚くべき複雑な植物と動物の原因は、偶然ではなく神である方がずっとありそうなことだ〉と考えるだろう。この二つの想定——〈神は存在する〉というものと〈神は存在しない〉というもの——は、科学の観点からは同等なものだと思われる。両方とも科学上の判断であるか、いずれもそうでないかだ。もし片方の判断に基づいて教育カリキュラムを決定することが宗教的信念の公定として憲法に反するならば、もう一つの判断に基づくことも同様だ。したがってこの状況では、政府は宗教の間で選択をしてはならないという生徒あるいは親の特別の権利に訴えかけることは役に立たないように思われる。学校委員会がいずれの決定をするにせよ、それはある宗教上の意見を選んで別の意見を斥けることを避けられないように思われる。このようなケースでは、政府は宗教を選んではならないという憲法の要請は自己破壊的だ。²⁶

IDを公教育に導入しようという立場も、それを公教育から排除すべきだとする立場も、いずれも特定の宗教的信念に基づくものだというネーゲルの見解を踏まえつつ、ドゥオーキン²⁶は、したがって、公立学校においてIDを取り入れた授業を行う決定をしても、IDを取り上げる授業を行わな

136頁。

26 *Id.* at 127-128. ドゥオーキン（森村訳）・前掲注（25）137-138頁。

いと決定をしても、いずれにせよ宗教的な信念に基づいた決定を公的な機関が行うことになってしまい、国教樹立禁止条項に抵触する——よって憲法の要請は自己破壊的とされる——ことになる。ならば、公教育へのID導入も公教育からのID排除も同等であるから、ID導入が合憲となる可能性があるということだろうか。ドゥオーキンはそのようには考えない。ドゥオーキンにとって、公教育にIDを導入することは、国教樹立禁止条項違反で明確に違憲である。ドゥオーキンによれば、宗教的自由を特別な権利としてみれば、ネーゲルの指摘は正しいが、宗教的自由を倫理的独立へのより一般的な権利²⁷として捉えたと、結論は異なるという²⁸。ドゥオーキンの説くところを見てみよう。

アメリカ文化の状況のなかでは、学校委員会がダーウィン主義に対する代替理論として知的設計を教えるように命ずる決定は、〈宇宙創造能力をもった神が存在する〉という、宇宙の歴史に関する厳格な事実についての想定を反映しているだけではない。その決定は、よき生のなかで宗教がはたす

27 ドゥオーキンの考えでは、「政治的自由は二つの別々の要素をもって」おり、「正義にかなった国家は、『倫理的独立』とでも呼べるものへの極めて一般的な権利も、特定の諸自由への特別の諸権利も、ともに認めなければならない」(Id. at 129-130. ドゥオーキン(森村訳)・前掲注(25) 140頁)という。そして、「倫理的独立が意味するのは、〈政府は人びとにとってある生き方——いかなる生がそれ自体としてもっとも生きるに値するかに関する考え——が別の生き方よりも内在的によいというだけの理由で——つまり、その生き方の帰結がよりよいという理由ではなく、その生き方をする人びとの方がよい人びとだという理由で——自由を決して制限してはならない〉ということだ。自由を尊重する国家においては、そのような問題を決定するのは一人一人の市民に任されていなければならない、政府がある見解を万人に押しつけることはできない」(Id. at 130. ドゥオーキン(森村訳)・前掲注(25) 140頁)という。他方、特別の権利は、「政府にはるかに強力かつ一般的な拘束を課する」(Id. at 131. ドゥオーキン(森村訳)・前掲注(25) 141頁)とされる。

28 「思い出してもらいたい。ネーゲルは、〈知的設計説は科学として間違っているという想定は無神論を前提としているが、これも宗教的な立場なのだから、知的設計説を禁ずることは国家が宗教の問題について特定の立場をとることになる〉と指摘したのだった。もしわれわれが宗教的自由を特別な権利として、その主題となる対象に即して理解するならば、ネーゲルの指摘は的を射ている。だがわれわれが特別な権利ではなくて倫理的独立へのもっと一般的な権利に依拠するならば、問題は違って見えてくる。」(Id. at 141. ドゥオーキン(森村訳)・前掲注(25) 150-151頁)

役割に関する一連の倫理的態度を採用し、それらの態度を新たな世代に注入しようとする野望を反映している。それは単に学問的主題についてバランスを取り戻そうと望んでいるわけではない——奴隷制の害悪を伝える資料を含むようなアメリカ史を要求した学校委員会だったらそう望んだかもしれないが。最初は学校に創造説——地球はまだ生まれて七〇〇〇年しか経っていないという——を教えさせようと試み、そして裁判所が創造説を排すると、一見したところもっと洗練された知的設計説を押し出した政治的キャンペーンは、それとは違う。それらのキャンペーンは、公共生活のなかで有神論宗教がはたす役割を増大させようとする、いわゆる宗教的右派の全国的キャンペーンの一部なのだ。これは解釈的判断だが、私思うに、難しい判断ではない。公立学校で知的設計を教えよという要請を違憲だと宣言したアメリカの判事は、その解釈的結論に依拠していた。その判事によれば、その学校委員会の多数派のメンバーの歴史と実践と声明は、彼らの行動の動機は純粋に学問的なものではなく、その全国的キャンペーンに沿ったものだった²⁹ということを示唆するものだ。

ドゥオーキン³⁰は、このように述べて、IDの公教育への導入の試みは、「公共生活のなかで有神論宗教がはたす役割を増大させようとする、いわゆる宗教的右派の全国的キャンペーンの一部」であるとし、ドーヴァー事件判決を支持するのである。また、創造科学が裁判所によって排除されたためにIDが登場した、という認識は、ヌスバウム³¹の見方と重なり合うものであり、ドゥオーキンも、IDは創造科学の進化形に過ぎず、特定の（有神論的な）宗教の促進が目的であるため、国教樹立禁止条項違反で違憲と判断するのだと考えられる。それでは、ネーゲル³²の問題提起に対し——しかも、ドゥオーキンはネーゲルの分析を踏まえ、IDの排除も宗教的信念に基づくものであるから、教育委員会がIDを排除しても国教樹立禁止条項

29 *Id.* at 142-143. ドゥオーキン（森村訳）・前掲注（25）151-152頁。

に反する結果になることを仄めかしていたように思われる——、ドゥオーキンの立場からは、どのように応答することになるのだろうか。

先に見たように、ドゥオーキンは、宗教的自由を「特別の権利」と見れば、ネーゲルの指摘は正しいが、「倫理的独立へのより一般的な権利」として見れば、結論は異なるとし、宗教的自由を倫理的独立への一般的な権利として見るべきだと主張している³⁰。したがって、この宗教的自由についての理解が変わったために——ドゥオーキンの立場からは、宗教的自由のより正しい理解への移行によって——ネーゲルの問題提起は真剣に受け止める必要のないものになるということなのかもしれない。

しかし、宗教的自由の捉え方に関するドゥオーキンの提案は、説得力が弱いように感じる。なぜなら、ドゥオーキンは、宗教的自由を「特別の権利」——「政府にはるかに強力かつ一般的な拘束を課する」³¹もの——として理解することをやめ、「倫理的独立への一般的な権利」として把握するべきだと主張するが、ドゥオーキンの主張は、宗教的自由は「倫理的独立への一般的な権利」としても理解可能だということまでの論証でしかなく、「倫理的独立への一般的な権利」としてしか理解できない——すなわち、宗教的自由を「特別の権利」として理解することはできない、あるいは、誤りである——ということまでの論証はなされていないように思われるからである。

というのは、第一に、ドゥオーキンがそもそも、「特別の権利」と「倫理的独立への一般的な権利」は、政治的自由の二つの別々の要素であると述べており³²、相互に排他的なものと考えられているように思われる——単にドゥオーキンがそのように考えていないというだけでなく、客観的にも両者は相互排他的な関係にあるものではないと考えられる——からである。そして、第二に、「特別の権利」としての理解を廃棄すべき理由に関

30 そして、宗教的自由を特別な権利と捉えることをやめるべきだと示唆する。See *id.* at 132-133. ドゥオーキン（森村訳）・前掲注（25）142-143頁参照。

31 *Id.* at 131. ドゥオーキン（森村訳）・前掲注（25）141頁。

32 *Id.* at 129-130. ドゥオーキン（森村訳）・前掲注（25）140頁。

して、「われわれが宗教の自由を定義する際に出くわした諸問題は、宗教を神から切り離すとともにその権利を特別の権利として保持しようとしたことから来ている。われわれはその代わりに、〈保護のハードルが高くて、それゆえ厳格な制限のためのやむにやまれぬ必要と注意深い定義がなければならない、宗教的自由への特別の権利〉という観念を捨てることを考慮すべきだ」³³と述べており、あたかも、宗教的自由を「特別の権利」として捉えた際の問題の解決が難しいから、別の見方をしようという便宜的、問題回避的な提案のように思われ、宗教的自由を「特別な権利」として捉えることをやめて、「倫理的独立へのより一般的な権利」として捉えるべき本質的な理由は明らかにされていないように思われるからである。

他方で、宗教的自由を依然として「特別の権利」として理解すべき理由がいくつか思い浮かぶ。例えば、ドゥオーキンが宗教的自由に関する法的文書として挙げる憲法や条約、人権規約等³⁴は、宗教的自由を「特別の権利」³⁵として規定していると解釈することが自然に思われる。また、法的に宗教的自由を確保するのは、まさに宗教が「特別」だからであって³⁶、宗教に関する自由は特別の権利として強く保障されていると考えることもできるように思われる。

このように考え、筆者には、ドゥオーキンの否定にも関わらず、ネーゲ

33 *Id.* at 132. ドゥオーキン（森村訳）・前掲注（25）142頁。

34 *See id.* at 105-106, 133. ドゥオーキン（森村訳）・前掲注（25）117、143頁参照。

35 ドゥオーキンは、「特別の権利は問題となっている主題に注意を固定させる。宗教的自由の特別の権利は、並はずれた緊急時でなければ宗教的活動を制限してはならないと宣言する。その反対に倫理的独立への権利は、政府と市民との間の関係に注意を向ける。その権利は、政府が市民の自由をいくらかでも制約するためにもちだすことができる理由を限定するのだ」（*Id.* at 132-133. ドゥオーキン（森村訳）・前掲注（25）142-143頁）と述べ、倫理的独立への一般的権利の優位性（有用性？）を主張しているように見えるが、様々な法的文書において規定されている宗教的自由は、「並外れた緊急時でなければ宗教的活動を制限してはならない」特別の権利と解すべき場合が多いように思われる。

36 ヌスバウムは、「私たちの合衆国憲法のもとでは、宗教は特別である」（NUSSBAUM, *supra* note 3, at 164. ヌスバウム（河野監訳）・前掲注（3）252頁）と明確に述べる。

ルの問題提起は、真剣に受け止めるべきものであるように思われる。すなわち、IDを排除する考えもある種の宗教的信念に基づくものかもしれず、そうであれば、国教樹立禁止条項に照らして、IDを排除しようとする試みも憲法上許されないかもしれないこと、そして、IDは創造科学と異なり、経験的証拠によってただちに否定されるものではないかもしれないこと、これら二点を踏まえた上で、どのように公教育におけるIDへの対応を考えるべきか、である。憲法で定められている宗教的自由を尊重しつつ、公立学校においてIDをどのように扱うべきなのか。この問いについて考える手がかりを憲法学者のグリーンナワルトの議論に求めたい。

5 グリーンナワルトの提案——公教育におけるIDに対する適切な対応

グリーンナワルトは、自然科学と宗教の関係についての検討を始める際に、自身の主張が、圧倒的多数の科学者に対してより、通説的な進化論の批判者に対して信頼を置くかのように見えるかもしれないが、そうした批判に最終的な判断を下したいという意図はないと断った上で、自身の議論の主たるねらいは、進化論教育を変えたいと考える多くの人が、憲法の限界内で、提言しているかどうかを評価することにあると述べる³⁷。そして、憲法上問題となる、宗教を教えることとみなされることはどのようなことかを検討する章において、教育者の責任について次のように述べる。

理科教師は、科学にとってかわる可能性のある非科学的な他のものについて、詳細に教えることは期待されることはないが、おそらく、人間が現実を理解する方法の中でどのように科学が適切であるのか、そして、なぜ、

37 See KENT GREENAWALT, DOES GOD BELONG IN PUBLIC SCHOOLS? 88-89 (2005). ネーゲルもグリーンナワルトのこの著書を参照している。See Nagel, *supra* note 14, at 203-204.

コミュニティのメンバーの中に、科学的探究より信頼できる真理の解明方法があると信じる人々がいるのかについて示唆するべきである。³⁸

進化論が正しいとか正しくないとかに関する聖書や神学上の議論は、端的に、宗教的である。理科教師は生徒にこのことを話してよいが、そうした議論が正しいか否かについては議論すべきではない。同じ結論が、進化論は正しいとして始まる議論、無神論や有神論につながる議論に対しても維持される。³⁹

このように、グリーンナワルトは、科学と宗教の関係について教師が授業で説明する際に、教師が何らかの宗教や信仰を否定する、あるいは肯定することにつながる議論を授業で行うことにならないよう注意を促しているように思われる。さらに、論争的となっている生命の歴史についての扱いについて、実践的な結論として次のように述べる。

理科の授業においては、進化論が有力説として提示されるべきだが、欠落や不確実性について明確に指摘しつつ、また、進化論と生命の起源に関する宗教的見解とは完全に両立すると信じる者も存在するし、宗教の教えと科学の発見が衝突するとき、宗教的な情報源がより正しい洞察のよりどころを提供すると信じる者も存在するというを示唆しつつ、進化論が提示されるべきである。ネオダーウィニズム理論の代替理論として提示されるものはどのようなものであれ、それが、科学的方法論によって支持される場合にのみ、科学として、あるいは科学の限界についての考え方として理科で教えられるべきである。教師は、複雑な生命の史的発展と自然選択の機能様式に関わる特定の難問が、秩序に関する諸原理は進化の過程のいくつかの側面を説明する助けになるかもしれないことを示している可能性

38 GREENAWALT, *supra* note 37, at 119.

39 *Id.*

があるとコメントしてもよいかもしれない。また、しかし、そのような秩序が科学的説明を超えてIDの存在を証明するとか決定的に示すと想定する確たる根拠はない、ということをコメントしてもよいかもしれない。⁴⁰

以上のように、グリーンワルトは、IDを正しいとするような議論も注意深く避けているが、他方で、IDを完全に否定するわけでもないため、IDは非科学的であり排除すべきだと考える進化論者から見れば、IDに対する対応が不十分なものに見えるかもしれない。グリーンワルトの姿勢は、宗教に対してきわめて敬讓的に見える。それでは、グリーンワルトは、科学的事実と宗教的見解が衝突した場合、宗教的見解を優先するのだろうか。仮に、公立学校において科学的事実を教えることが、宗教的見解あるいは信仰を否定する恐れがある場合、そうした科学的事実を教えることは控えられるべきなのだろうか。そのような場合、グリーンワルトは、科学的事実を教えるべきではないとは決して考えないだろう。というのは、グリーンワルトは、学校教育が特定の宗教的見解を害することがあることは認めており⁴¹、そして、それがただちに憲法違反になるとは考えていないからである⁴²。それでは、グリーンワルトはどのような考えなのであろうか。彼は次のように述べる。

私は中間的な策、すなわち、進化論者が唯一の正しい科学のアプローチと主張するものと、創世記とインテリジェント・デザインの支持者が求め

40 *Id.* at 121.

41 *See id.* chap. 5.

42 グリーンワルトは、「何を真理として教育するののかの規準が、宗教的な判断に何ら依拠していないのであれば、宗教的見解との衝突は、国家が反宗教的立場を取っていることの証明にはならない」（*Id.* at 118.）と述べる。また、IDの合憲可能性を示唆するネーゲルも、公教育が宗教的見解を否定することがあることも認めるし、それが憲法違反だとも考えていない。ネーゲルは、「国教樹立禁止条項が禁じているわけではないので、公教育において暗黙の拒絶を受ける特定の宗教的信念が存在したとしても、それは科学的合理性の基準と両立しないという正しい根拠に基づいて、違憲とならない」（Nagel, *supra* note 14, at 199.）と述べている。

るものとの間のどこか、を提案している。中庸の勧めは、教条主義と不誠実とを互いに通例糾弾しあう敵対した両陣営には、訴えるところがほとんどないかもしれない。進化論者は、多くの正当化論を用意して、インテリジェント・デザインが、理科の教育課程に宗教的反対論をこっそりと忍ばせる仕掛けとして多くの人々に支持されているとの疑いをかけている。インテリジェント・デザインの支持者は、多くの正当化論を用意して、審理もなく法廷から自分たちの立場が排除されていると非難している。どちらの側も、しばしば相手の議論が可能な限りばかげたものと見えるようにと試み、科学を教えることがどの程度科学のありうべき限界に関わるべきか、そして地球上の生命の歴史がそのような限界に関連しているかもしれないということを想起させる確たる根拠が、進化論に対する批判にあるのか否かといったことへの公正な評価や、忌憚のない議論にさえ、ほとんど関心を持たないように思われる。それでもやはり、私が素描した指針は、教育上も、憲法上も道理に適うものである。⁴³

グリーンワルトの議論は、グリーンワルト自身が認めるように、IDを完全に否定すべきものと考える進化論者からすれば、中途半端なID擁護論に受け止められるかもしれない。⁴⁴しかし、憲法によって信仰の自由が保障される社会にあっては、グリーンワルトの示すIDへの対応は正しいもののように思われる。なぜなら、科学的事実によって解明されていない領域に関しては——少なくとも科学的事実によって否定されていない限り、いまだ科学的探究によって決着がついていない事柄については——信仰の領域であり、そこでの何らかの宗教的信念は、他の信念と同等に尊重されるべきように思うからである。宗教的信念は様々であり時に対立するものである。それらに国家が優劣をつけるべきでないとするならば、科学的に解明されていない領域の事柄に関する見解は、それがいかに科学的に

43 GREENAWALT, *supra* note 37, at 124-125.

44 *See supra* note 37.

見えたとしても、それは宗教的信念であって⁴⁵、特定の見解によって別な宗教的信念を否定することは許されないと考えるべきなのではないだろうか。

6 むすびにかえて

本稿では、四人の論者の見解を紹介、検討しつつ、宗教的自由を認める社会においてIDに対してどのように対応すべきかについて考えてきた。概括的に見れば、ヌスバウムとドゥオーキンとは、IDは国教樹立禁止条項違反で違憲との立場が共通し、ネーゲルとグリーンナワルトとは、IDに対して慎重に配慮しつつ対応する姿勢を保つ立場が共通するように思われる。しかし、これら二つの立場は、それほど離れていないようにも思われる。先に確認したとおり、ネーゲルとグリーンナワルトも科学的事実に対する主張を認めるわけではないし、公立学校での理科教育によって宗教的信念が否定されることも認める。ネーゲルはIDをめぐる議論について注意深く分析し、進化論者が科学的に証明することのできない領域に関わる信念については、それを否定できず、仮に、IDへの言及が進化論の理解の深化に資するのであれば、そのような世俗的目的（のみ？）を有し、IDの公教育への導入について合憲判断の可能性もあり得ると述べていたが⁴⁶、世俗的目的がなければ、IDの公教育への導入については国教樹立禁止条項違反で違憲と考えるのではないだろうか⁴⁷。そうであれば、四人とも、宗教的目的の立法は認めないという立場であるから、その点については、

45 ネーゲルは、このことを指摘していたのだと思われる。See *supra* note 22.

46 See *supra* note 24.

47 ネーゲルは、レモン・テストとエンドースメント・テストを用いて、IDの合憲可能性について言及しており、レモン・テストやエンドースメント・テストの廃棄を主張しているわけではないから、この点では、他の論者との間に大きな懸隔があるわけではないように思う。See *id.*

大きな相違はないことになるだろう。したがって、ID以前の、宗教的理由からの進化論に敵対的な立法に関しては、四者ともに国教樹立禁止条項違反で違憲という結論になるのだろう。筆者もこの結論に異論はない。

これまでのところ、宗教的な理由に基づいて進化論に敵対的な立法が試みられたため⁴⁸、そうした立法は国教樹立禁止条項違反で違憲とされ、公立学校における進化論教育の問題は、一見すると、結論が出ているように感じられる。しかし、信仰の自由が保障される社会において、創造論やIDを信じる人々の信仰をどのように考えるべきなのか。筆者の関心はこの点にあった。本稿で検討した四人の論者のうち、ネーゲルとグリーンワルトは、反進化論の立法に留まらず、進化論とは相容れない信仰を有する者たちへの対応——信仰の自由の保障を真剣に考えつつ——についても配慮された議論であったように思う⁴⁹。繰り返しになるが、筆者も、宗教的な目的による反進化論的立法が違憲であることに疑いはない。しかし、公教育によって信仰が否定される者たち——正しい理科教育によって信仰が否定されることがあってもやむを得ないと筆者も考えるが——への配慮は不要なのであろうか。

ネーゲルとグリーンワルトの議論は、この点に関し、IDをめぐるのは、

48 これは、反進化論陣営が、進化論教育を公的な問題と捉えて闘争を挑んだためだと思われる。次の二つの指摘を参照。「子どもたちが高校に進学して進化論を教わるようになれば、自分たちの価値観やそれに基づく教育が脅かされることになるだろう。そうなれば、いずれ家族の繋がりがまで壊しかねない。こうした場面になると、宗教を『個人の内面』の問題であるとか『教会の内部』の問題であるなどと言って済ますことはできなくなる。そこで信徒たちは、公立学校で進化論を教えることを禁じる『反進化論法 (Antievolution Law)』の成立を目指すようになったのである。」(藤本・前掲注 (16) 78頁)、「進化論にたいする福音派の反対は、厳密に言えば科学にたいする反対ではなかった。常にそれは政治への反発であった。親は世界における神の顕現を子供が学ぶように望んでいるのに、それを捨てさせるような教えを叩き込むのに公共教育予算が使われるとして、憤慨したのである。」(MARK A. NOLL, GOD AND RACE IN AMERICAN POLITICS: A SHORT HISTORY 158(2008). マーク・A・ノール (赤木昭夫訳)『神と人種 アメリカ政治を動かすもの』(岩波書店、2010年) 167-168頁)。

49 単に反進化論立法の違憲性を検討するだけでなく、教師がIDについてどのように述べるべきかについて議論している点が特徴的であるように思う。

IDが宗教的な出自のものだから、あるいは非科学的だから、ということ
で容易に切り捨ててしまうと見落としてしまうことがあることを示唆して
いるように思われる。本稿のはなはだ不十分な検討から明確な結論を引き
出すことは難しいが、本稿での四人の論者の議論の検討を通して、IDに
関する論争を「宗教か科学か」、あるいは「非科学か科学か」、という対立
図式を用いて見るだけでは看過されがちな、宗教的信念への配慮——宗教
的自由を保障する社会であるならば必要とされるはずの——が、必要であ
ることの示唆が若干得られたのではないかと考える。

